《論文》

佐々木順三の信徒像とキリスト教研究
――邦、二郎、順三三兄弟の信仰歴と併せて――

松平　信久

佐々木順三（以下、人名の敬称略）は、太平洋戦争敗戦直後の時期に、立教大学総長に就任した。立教大学は、戦時中に、その教育目的から「基督教」を削除したほか建学の理念に悖る施策を行ない、戦後も荒廃したチャペルを放置した。1945 年 10 月 24 日に GHQ から日本政府に出された指令覚書「信教の自由侵害の件」で、立教の戦時中の行為が「不当なる蛮的行為の一特例」として名指しで鋭く批判され、幹部 10 名が追放された [(1)]。その後を受けて、佐々木は 1946 年 6 月に総長として着任し、1955 年 6 月に退任するまで、立教学院のキリスト教教育機関としての再建の課題に取り組んだ。本稿は、そのような課題を担ったキリスト者としての彼の足跡と、それを支え合った兄弟たちの信仰歴、および佐々木のキリスト教研究の経緯と内容を追うことを目的としている。なお筆者は、立教学院史資料センターの紀要『立教学院史研究』の第 15 号（2018 年 3 月刊）に、「佐々木順三の思想・信条と教職歴　戦後復興期における立教大学総長の人物像」と題する評伝を執筆している。本稿は、その評伝を下敷きにしながら、かつ両者は相補関係にある。

Ⅰ．佐々木兄弟のキリスト教との出会いと入信

1．キリスト教との遭遇

佐々木順三は、1890（明治 23）年 3 月 2 日に東京市芝区明船町で生まれた。順三は四人兄弟 [(2)] で、長兄・邦（日本を代表するユーモア作家として活躍）、

次兄・二郎（日本聖公会の聖職となり、京都教区の主教を務めた）、弟・義朗（法曹界への道を進み、名古屋控訴院の判事となる。40 歳で腸チフスのために逝去した）に挟まれた三男である。

建築技師であった父・林蔵の仕事[(3)]の関係で、家族は住所を何度か変えているが、1900（明 33）年に大阪に移転した。そして、東京で就学中の長兄の邦以外の兄弟たちは、大阪で、それぞれの進学先に通うこととなった。二郎は私立桃山中学二年級に転校し、順三もこの地で高等小学校を卒業した後、桃山中学校に入学した。桃山学院は、英国聖公会の宣教団体である CMS（Church Missionary Society= 英国教会宣教協会）が 1884（明治 17）年に発足させた学校で、大阪では最も旧い歴史をもつ男子ミッションスクールである。

この学校選択には、「二郎、順三が桃山に入ったのには邦の影響があったと思われる」と、邦の孫にあたる松井和男は祖父の評伝（松井 2014/101p）で述べている。邦は、先に在籍した青山学院でキリスト教に接した経験から、弟たちの学校選択に助言を与えたことが推測される。彼は、早稲田中学校在学中に肋膜炎を患い、約二年間学校から離れていた。その間の散歩の折にたまたま青山学院前を通り、その赤レンガや白亜の建物に魅せられ、また外国人教師から学べることを期待して、同校への進学を決めたのであった[(4)]。従って、当初は、キリスト教への関心も知識も皆無であったが、寮に入って礼拝や祈祷会などに参加するようになったことから、それに積極的に関わるようになった。彼のキリスト教との出会いは、このように偶然的要素が強かった。偶然と言えば、二郎も郷里の静岡県清水村にいる時は商業学校に通っていたのだから、父の転勤と邦からの勧めがなければ桃山学院のようなキリスト教系学校との接点は恐らくなかったであろうし、順三にとってもそれは同じであった（但し本稿の文末にあるように、順三はそのような経緯を「偶然とは思えない」と述べている）。

邦は青山学院の高等部を中退したあとも、メソジスト派の三田教会や三田聖坂にあるフレンド派（クェーカー派）への教会の礼拝や祈祷会に出席

していた。そのために、夏休みに大阪の家族のもとに戻って来た時も、その習慣を重んじ、日曜日にはよく弟二郎を誘って近くの内野町にあるメソジスト教会に通っていた。二郎は、その後自ら進んで教会に出席するようになったが、ちょうどそのおりに、住居と同じ地区内に新しい教会が建てられたので、順三を伴ってその教会に出席するようになった。その教会は、聖公会の聖ヨハネ教会であり、当時のこの教会の牧師は早川喜四郎司祭であった。

2. 二郎の受洗とその後

二郎は、この聖ヨハネ教会の早川司祭のもとで洗礼を受けた。そして桃山中学校を卒業の後、1904（明治 37）年 9 月から三一神学校（後の聖公会神学院）に進んだ。

三一神学校の学生は、日曜日には、所定の教会に派遣され、その教会の牧師のもとで、礼拝、説教、牧会学の実際を学ぶことになっていた。二郎と、同級生で親友の須貝止（後、東京諸聖徒教会牧師、聖公会神学院校長、南東京教区主教）が派遣されたのは、神田小川町の東京諸聖徒教会であった。この教会の当時の司牧者は、立教学院総理・ヘンリー・セントジョージ・タッカー司祭 (5) であった。「タッカー師の学殖と崇高な人格が彼らに大きな影響を与えたことは云うまでもない」（佐々木 1970/40p）と順三は書いている。

二郎は、1908（明治 41）年、神学校を卒業後、直ちに所属する京都地方部（教区）の大阪聖ヨハネ教会に伝道師として赴任し、早川司祭のもとで聖職者としての第一歩を踏み出した。

この時期、聖ヨハネ教会など大阪の教会は京都地方部に属していたが、1912 年にその教区主教として上記のタッカー師が着任した。

タッカーは、日本滞在の回想録である“Exploring the Silent Shore of Memory”（「思い出の静かなる岸辺を探りて」）のなかで、早川についてこう書いている。「彼は教区内で最も有能な日本人聖職者の一人で、聖ヨ

ハネ教会での長い司牧期間中に若者を教会に引きつけることに非常に成功しました。彼の影響を通して、我々の若い立派な聖職者とその候補者の何人かが生まれました」（タッカー 1951/201p）。

二郎はこの早川とタッカーという二人の旧知の先達に導かれてその任務に励むことになったのである。

京都教区主教として赴任したタッカーは、教区運営の目標の一つに、「日本の教会の指導者は日本人であるべき」ことを掲げた（タッカー 1951/ 252p）。そのような施策の一環と考えられるが、二郎は、1913（大正 2）年 7 月に米国コネティカット州のバークレイ神学校（Berkley Divinity School）への留学を命じられた。彼は、この学校で三年間の研鑽を経て帰国し、執事に叙任され、金沢の聖ヨハネ教会に赴任した。留学で得た新知識のほか、日本古来の歴史や美術への造詣も深く、温厚篤実な人柄と相俟って、彼は信者達から敬愛された。また、その頃の日本ではまだ珍しかった青年会活動を活発に展開し、金沢の教会は活気に満ちたものとなった。その様子を見て、タッカー主教は、「司祭授任のための教理学の学識に対する必要条件を満たしており、キリスト者としての人格と実際的な能力によって聖職者としての適格性を示していることを、私は付け加えたいと思います」（タッカー 1951/ 252p）と二郎を高く評価している。二郎は、その後いくつかの教会での勤務を経て、1941 年に、京都教区主教に選出された。

3. 順三の受洗

順三は、二郎に続いて洗礼を受けた。彼は、受洗とその動機について、「私は明治三十六年（一九〇三）十三歳で、桃山中学二年生の時、大阪の聖ヨハネ教会で長老早川喜四郎牧師から受洗した。受洗の動機というようなものはないが、強いていえば、当時長兄邦が慶応の学生でフレンド教会の会員であり、次兄二郎は桃山中学の五年生で聖ヨハネ教会の信者であったので、私もヨハネ教会に出席して居るうち、早川先生のすすめで受洗したの

である」（佐々木 1970/ まえがき）と述べている。強い回心経験や精神的渇望などを伴わない、いわば自然体の入信であった。しかし順三のその後の信徒としての歩みは、真摯な姿勢と篤実な信仰心に貫かれたものであった。彼は、受洗の翌年、1904 年 10 月 27 日に、沼津聖ヨハネ教会で堅信按手を受けた。この年はといえば、父が失職し、順三は学業の継続を見送って清水村で母を手助けしていた時期である。このような困難な状況下で、彼は、沼津の教会で信徒としての生活を送り、堅信按手を受ける準備を進めていたことが分かる。

順三は数年後に一高に入学し、再び東京に戻ってからは、東京諸聖徒教会に属し、地方勤務の時期を除いて、生涯を通じてその教会の信徒として過ごした。諸聖徒教会との繋がりの発端は、先に述べた通り、神学生としてこの教会で主日勤務をした兄・二郎が「明日の日曜日は俺が説教するから聞きに来い」と誘った（研二 2004）ことによる。

4. 邦の場合

ところで邦は、青山学院に在学中に、日本のキリスト教学校の土台を揺るがせた大事件に遭遇した。それは、邦が同学院中等部の五年に進もうとしていた 1899（明治 32）年に起きた「文部省訓令一二号」事件であった。これは、認可を受けた中等学校では、教育課程の正課、課外を問わず、一切の宗教教育や宗教活動をしてはならないという訓令であった。ミッションスクール各校は、(1) 訓令に従って宗教活動を停止するか、(2) 訓令の受け入れを拒んで各種学校に格下げとなるか、(3) 廃校にするか、を選択しなければならなかった。(2) を選べば、卒業生が高等学校に進学する道が閉ざされる。この訓令は、事実上キリスト教系の学校を狙い撃ちにしたもので、同系の学校は未曽有の危機に立たされた。青山学院中等部は、(2) の各種学校として残る道を選んだために退学者が続出した。邦の同級生は 24 名であったが、15 名が退学し残った者は邦を含む 9 名にしか過ぎなかった。（松井 2014/ 102p）。彼は、自伝的小説『心の歴史』の中で、その主人

公につぎのように語らせている。「私は中学令を思い出すと、所謂大東亜戦争も東亜共栄圏も軍ばかりの責任ではないと考える。すでに五十年前に、日本の政府は最高教育から基督教の分子を徹底的に排除しようと試みたのである。八紘一宇の妄想はもうその頃から萌していたのである。以来官僚の教育はその鼓吹を主眼とした。軍人は思想家ではない。文部省が長年かかって思想の体系を完成したのだ。（中略）私は私学が官学に取って代らない限り、日本の民主化は覚束ないと思っている」（外山 2000/ 69p）と鋭く批判している。

邦は青山学院時代には受洗に至らず、その後進んだ明治学院でも、親友となった日高善一（後、牧師）、都留仙次（後、フェリス和英女学校々長、明治学院々長）、賀川豊彦（後、キリスト教社会運動家）、三谷隆正（後、法学者。六高、一高などの教授）ほか多数のキリスト者と知り合いになったが、彼自身はキリスト教に懐疑的となり、理性的に理解できないものは受け入れないとする不可知論者となった。彼が、再びキリスト教に目を向けるようになったのは、後述のように、晩年になってからのことである。

Ⅱ．佐々木順三のキリスト教研究

佐々木は、自分自身のことを、英語教師であり神学者ではないと述べているが、キリスト教に関する彼の識見や慧眼は卓越している。以下にその様相を俯瞰してみよう。

1．内村鑑三に学ぶ

順三が生涯を通じて、思想的、人格的に最も大きな影響を受けたのは、彼が一高に進学した時の校長、新渡戸稲造[(6)]からであった。新渡戸自身キリスト教徒（クエーカー派）であったが、聖書やキリスト教の研究に関しては学生達に札幌農学校の同期生である内村鑑三を紹介した。佐々木が一高入学以前から内村に注目していたか否かを、筆者は確かめることができなかった。しかしいずれにしても、新渡戸との出会いを通して、内村へ

の関心を高めたことは確かであろう。佐々木は著書『平民の信仰覚書』の中で、つぎのように述べている。

「日本の宗教家では、内村鑑三氏（1861～1930）に多く負うて居ることを附け加えて置きたい。内村先生は、明治の半頃から大正年代にわたって、日本のキリスト教界に最も大きな影響を与えた人で、予言者（ママ）のような鋭く強い性格と、広く深い学殖をもって、当時のエリートたる高校生や大学生を強く引きつけ、日曜日の先生の集会には、秀才といわれる学生達が挙って参加し、先生のお話しに心を傾けて聴き入っていたのである。私は先生の著書や研究誌を愛読していたが、先生の集会に出たこともなく、写真を通して以外には、先生の英姿を見る機会もなかった。それは私が子供の時から聖公会の信徒で、毎日曜には欠かさず教会に出席していたからであり、又先生の前に罷り出るような秀才組に入っても居なかったからである」（佐々木 1970/ まえがき）。

この記述に見られるように、佐々木と内村の関係は、書物を通しての「私淑」とも言うべきものであったが、その影響の大きさは、『平民の信仰覚書』の随所に反映されている。

2. イギリス留学

佐々木は静岡高校教授時代に、文部省から命を受け、イギリスを中心として米仏にまたがる留学をしている（1925・大正 14～1927・昭和 2 年）。この留学の目的は、英文学研究と英語教育法の研究であったが、前者は、英訳聖書、英国国教会の祈祷書、それと関連の深い英詩や関連論文の研究であったことが推測される。そして、留学時代のことにいて、「Bishop C. Gore（1853～1932）[7]、Bishop A. C. Headlam（1862～1947）[8]、Dean W.R.Inge（1860～1954）[9]、Baron Friedrich von Hugel（1852～1925）[10] ――これらの人々は、今世紀前半、英国宗教思想界の重鎮で、私が四十数年前、英国に留学して居た頃、何れも健在で、私は彼らの著書を熱心に読み、Bp.Gore や Dean Inge の説教は屡々聴きに行ったものである」（佐々木 1970/ まえ

がき）と書かれていることから、その研究対象（少なくともその一部）が分かる。これらの人物の中の、ゴアやヘッドラムなどは、オックスフォード運動の主要な担い手であり、佐々木の問題関心の一端が窺える。オックスフォード運動は、イギリス聖公会の中で展開された運動で、カトリック教会の信仰や伝統を肯定的に見直し、そこに生きている古代教会以来の教会の在り方に倣い、教会の権威を回復するとともに、教会外からの圧力や干渉を排除しようとするものであった。また、宣教、神学教育、社会問題への取り組みを進める動きもこの運動によって促進された。

3.『教会暦年の研究』

これは 1939（昭和 14）年に出版された佐々木の主著であり、彼のキリスト教研究の内容とその特徴を代表しているものと言えよう。以下はその「はしがき」の一部である。

「著者は、英語の教師にして、聖公會の會員である、而して、自己の專門と信仰との共通對象として、久しく The Book of Common Prayer（英國祈祷書）に特別の興味を感じて居るものである。先年英國に留學の機會を得た時、多少この方面の文獻を求めて歸つたが、不勉強と俗務の爲、志はありながら、その大部分を空しく書架に束ねたままであるのは、慚愧の至である。本書は著者の英國祈祷書研究[11]の一報告たるにすぎない。」

ここに見るように、この著作は英国国教会の祈祷書と、その重要な構成要素である教会暦に関する研究である。その基本的視点は、(1) 教会暦の形成過程を、古代教会以来の礼拝の形式や内容の変化と関連づけ、一方で、ユダヤ教をはじめとした他宗教の行事や民間伝承と結びつけて考察する (2) 自由祈祷の意義を認めながら公祷の価値を重視し、その集大成である祈祷書の成立過程や構成を明らかにする (3) 宗教改革期以来の、プロテスタント教会によって廃されたり軽視されてきた教会歴について、それがイエスの命じた聖餐式に起源を持つものであり、また、キリスト教徒の信仰生活に活気とリズムを与えるものとして、その意義と役割を再認識し、

その詳細を明らかにすること、などにおかれている。

上のうち、(1) に関して本書では、(i) 古代教会での礼拝の中心が聖餐式に集約される過程の中で、先ず、復活日と降誕日が祭日として位置づけられた。(ii) この二大祝日を基軸として、処女マリヤ蒙告日（聖マリヤへのみ告げの日)、四旬節（大斎節)、受苦日、昇天日、聖霊降臨日などの祝日、斎日が位置付けられたことが明らかにされている。(ただし、それぞれの暦日としての設定や日付は、東西の教会、古代教父の考え方などにより差異があることが指摘されている)。(2) に関しては、つぎのような知見が呈示されている。(i) 英国國教会祈祷書の構成において重要な要素である使徒、聖徒、重要人物の記念日は、赤字祝日（Red Letter Days = より重要な祝日)、黒字記念日（Black Letter Days = 左に準ずる祝日）に指定され、年間の暦日上、それぞれの所縁の日に配されている。またこのことの意義を強調したJ・H・ニューマン（John Henry Newman）[12] の美しい文言が紹介されている。(ii) 禁欲節制と修養に努めるべき斎日について、その由来や制定経過が詳述されている。断食や精進（軽度の断食）の意味や方法、無理な強制の問題点等が論じられている（iii) 各祝日に配された「特祷」について、「特祷を研究し、且つ用ふる人々は、必ずやその価値と美とを認識せずには居られないであろう」（本書 79p）と述べてその意義や祈りとしての完成度が称賛されている。(3) に関しては、信徒の信仰生活上の必要性から、教会暦の意義が改めて強調され、その観点からのR・フッカー（Richard Hooker）[13] の言説も引用されている。

なお本書では、毎週日曜日の主日や、各祝日、斎日の意味や来歴について詳しい解説がなされ、それぞれの日に配された、使徒書、福音書、特祷の紹介がされている。また、記念日にあたる各人物の特徴や事績についても詳述されている。ただし、これらの人物や事績については、日英間の馴染みの程度の差異、時代的変化などから、現代の日本の教会では、ほとんど注目されないものが多い。

4. 立教大学文学部・大学院での講読や講義

(1) テーマとテキスト

佐々木は、1946年度から1965年度まで、キリスト教学科と同大学院組織神学専攻修士課程、および、英米文学科と同大学院において講義を担当した。そこには自ずと担当者の研究領域と問題関心が反映されている。ここでは、入手できた1958～65年度の文学部履修要綱によって、講義のテーマと内容の概要を検討してみたい。

(i)「英書講読」(キリスト教学科学部2年生向け):「宗教家、哲学者、思想家の書を読むことを目的」としている。その年度別のテキストと該当年度は以下の通りである。

＊ The Thoughts of Blaise Pascal (1958) (1962)

＊「Oxford Movement の中心人物の一人 J.H.Newman」; Selected Essays (1959)

＊ Thomas P.Neill ; Religion and Culture (1960) (65)

＊ Plato の The Apology of Socrates & Crio (1961) (64)

＊ The Symposium of Plato (1963)

(ii)「キリスト教文学 (一)」(キリスト教学科、英米文学科共通):

＊「英文学に及ぼした聖書の影響;聖書と並行し英詩を読む」ことをテーマとしている。

Norman Ault[14]; The Poet's Life of Christ、D.H.S.Nicholson[15]; English Mystical Verse、Lord Cecil[16]; Christian Verse 、その他の Anthology (1958) (59)

＊「英文学に及ぼした聖書の影響を知る一環として、英訳聖書と並行して、それに関連ある英詩を読むことを目的とし講読をする。英詩は種々の詩集から選び text として配布」(1960) (61) (62) (63) (64) (65)

(iii)「キリスト教文学 (二)」(キリスト教学科・英米文学科、英米文学専攻修士課程共通):

＊「英訳聖書の歴史;聖書の成立と、英訳までの経過」について、「Wycliffe,

Tindale, Coverdale, Great Bible となる経過をたどり、遂に 1611 年の Authorised Version になって英国民の書となった経過と、更に Revised Version を経て更に 1952 年のアメリカの Revised Standard Version や現代の諸訳に至る歴史」を講じる。

＊「英国教会の暦と民間伝承」;「英国の教会と社会は主として教会暦による祝日や行事に従って動かされ、またそれに伴って色々の民間伝承が生じて居る事を概説したい」(1961)(64)

(iv)「アングリカン祈禱書研究」(組織神学修士課程):

＊〔1928 年の英国祈禱書について〕

「Rt. Rev. Arthur C.Headlam（Bishop of Gloucester）の所説を中心として（1960)(61)(62)。

(2) 各講読や講義の意図と特徴

(i) の「英書講読」は、学部 2 年生対象の入門的講読であるが、テキストが多様であり、また年度によっては、かなり専門的な内容が扱われている。パスカル [17]、プラトン、ソクラテス [18] は誰でもその名を知っていると言えるが、ニューマンやネイル [19] は、一般には馴染みがないだけに、意欲的なテキスト選択といえよう。

(ii) の「キリスト教文学（一)」では、一貫して、「英文学に及ぼした聖書の影響」をテーマとして、「聖書と並行し英詩を読む」ことが行なわれている。

(iii) の「キリスト教文学（二)」では、聖書の成立過程や、英訳聖書の歴史が講じられている。佐々木の、英訳聖書に関する該博な知識が遺憾なく発揮されたことであろう。年度により、彼の著書の主題でもある「英国教会の暦と民間伝承」が採り上げられている。

(iv)「アングリカン祈禱書研究」は、組織神学専攻の大学院での講義である。この分野は佐々木の専門領域であり、まさに「余人を以って代えがたい」担当であったろう。

5.『平民の信仰覚書』

この書は「私も子孫に遺す金銀はない。然し私の生涯を支えてくれた最大の資産はキリスト教の信仰であると確信するので、それを私は家族に遺して行き度い。殊に勉強中の年若い四人の孫達（大学、高校、中学、小学）に、私が少年時代から学んで来た信仰の覚書というようなものを遺し度いと思うのである」（佐々木 1970/ まえがき）との意図のもとに書かれた。孫達向けと断ってはいるが、佐々木の信仰とキリスト教研究の集約がなされていると言える。本書では、古代教父たちの論説や、ゴア、ニューマン、キーブル（John Keble）[20]、ピュージー（Edward B.Pusey）[21] らの、オックスフォード運動と関わりのあるイギリスの神学者、内村鑑三らの著作から多くの参照がされている。

以下にその章項目をあげ、引用者による内容のメモを摘記する。

まえがき

第一章「科学と宗教」 科学と宗教の相補性が論じられている。宗教が科学を育て、科学が宗教を正す。パスカルの言葉や、インゲの所論が引用されている。

第二章「天地の創造主全能の父なる神」 神の愛の表れとしての創造。神の似姿としての人間。創造の極は、イエスの受肉降世による神と人のとりなしである。

第三章「その独り子主イエス・キリスト」 イエスは自らを「人の子 Son of Man」と呼んだ。彼の働きは、贖罪が主目的であった。

第四章「処女生誕のキリスト」 創造の前提となる、当然性をもつ美しき奇跡。内村鑑三の論証が引用され、インゲ、ゴアの所論も紹介されている。

第五章「主イエス・キリストの奇跡」 イエスの奇跡は、神の霊のわざであり、力の誇示や神の子であることを宣伝するためのものではない。この奇跡は、愛と恵みに満ちた宣教や牧会の根本的要素である。

第六章「主イエス・キリストの復活」 キリスト教の中核。これなしにはキリストによる贖罪が完成しなかった。ペテロやパウロによる力強い確

信と証言に言及。

第七章「聖霊」　聖霊の働きは神とイエスの働きと一致する。使徒たちを強めた聖霊。内村鑑三の「聖霊に関する研究」を高く評価している。

第八章「教会」　教会は、地上における神の国の想像図である。その特質は、唯一性 unity、神聖性 holiness、普公性 Catholisity、使徒性 apostolicity である。Inge の論などによる、教会一致の課題にも言及。

第九章「終末論」　死、最終審判、天国（安心、光明、平和、回生）、地獄について論じられている。死後、最後の蘇りの日を待つ「中間期待の状態」= intermediate waiting state の意味の探究。

あとがき

Ⅲ．祈り、聖書、教育

佐々木の総長在任中、立教学院のチャプレンであった竹田鐵三は、その回想録で、「先生はよくお祈りされる人であった。それと同時に神のみ言葉なる聖書をよく読まれた人であった。したがって稀に見る聖書通、聖書講義の達人。それもソノ筈、毎日読む聖書が何冊もスリ切れたという」と書いている。

そのような姿は、共にすごした家族にも強い印象を残している。以下は、佐々木の次男・研二夫妻とのインタヴュー記録（佐々木 2004）からの抜粋である。

佐々木（妻）「（この子＝長男が）立教小学校に行っているころに時々、多分私に歯向かって何か言ったのでしょうけれども、書斎に呼ばれて、箴言の中からか『何とかは父の悲しみ、何が母の悲しみなり』[22] でしたか、『お母さんにそういうことを言ってはいけない』と一対一で叱られて。そういう思い出があるらしくて。」

佐々木「いきなり叱るのではなくて、ぱっと聖書を開いて、『ここを読め』と言うのです。『もう一回読んでよくわかったか』と。」

インタヴューアー「もう普段から聖書を持ち歩いて。」

佐々木「いや、持ち歩いているより、頭の中にそれが入っていたのですね。」

佐々木「(立教に赴任する前に勤務した「都立高等学校」[23] で) 土曜日だけは全校生徒が集まる。そのときに、校長訓話もあるわけです。そのときに、話というのは聖書の話しかしなかったと僕は聞きましたよ。何でそんな、ほかの話をすればよかったじゃないかと。『俺はほかは知らないから』と言っていました。」

これらの言葉の中に、佐々木と、祈り、聖書、教育の関係がよく表れている。

Ⅳ. 支え合う兄弟たち

冒頭で述べたように、順三たち 4 人兄弟の内、末弟は 40 歳の若さで亡くなった。残された兄弟たちは、このほかにも度重なる家族との死別を体験している。邦には、5 人の子どもがいたが、そのうちの 4 人（男 2 人、女 2 人）と 2 人の孫に先立たれている。長女は最初の子どもを出産した際に、産褥熱のために 20 歳代で亡くなった。次男は出征先で戦死し、次女は乳がんのために亡くなり、その遺児も夭折している。さらに長男も、1956 年に病死した。妻との死別は、1947（昭和 22）年、彼の 63 歳の時であった（後、再婚)。また、次兄二郎も「家庭的には不幸で、既に家庭を持った長女と長男と、又次女の婿を失い、更に老境に入って糟糠の妻に先立たれ、甚だ不幸の生涯を送っていた」（佐々木 1983/111p）のであった。順三は晩年に長男を失っている。これら肉親の死との遭遇の度毎に、兄弟たちは互いにいたわり力づけ合っている。その一例として、邦の長男仙一が逝去した際のことは特に印象深い。「それは兄にとって又家族にとって実に悲しい出来事であった。幡ケ谷火葬場で茶毘に付す前、兄は私の手を握ってサメザメと泣いて『私はスッカリくじけてしまった。頼むよ頼むよ。』

と云うだけであった」（佐々木 1983/ 107p）と順三は記している。邦は多忙であったために、仙一との関わりが薄く、その子ども時代からしっくりしない面があったので、順三がそれをカバーし父親代わりの役割を担っていたという。そのような関係もあり、仙一の葬儀は順三が取り仕切っている。

このような不幸の時だけでなく、3 人は高齢になるまで、親しい交流を続けている。立教大学総長への就任を渋る順三を二人の兄たちは励まし促している。

以下の引用は晩年の邦と順三との微笑ましい交流の状況を描いている。「健康に故障があり、何となく寂し気な兄を私は時折り訪問したが、彼は非常に楽しみをもってこれを歓迎し、予め通知すると、時を計らって門前に立って、遠くから私の近づくのを手を振って迎えてくれるのであった」（佐々木 1983/ 116p）。

ところで、前述の通り、弟二人がキリスト教と出会うきっかけを作ったのは長兄邦であったが、邦自身は、長くキリスト教とは距離を置いていた。しかし、多くの家族との死別に遭遇し、それをきっかけとして自分自身の死後や霊について考えるにつけ、邦の気持ちにも変化が生まれてきた。「もう一つ兄の心を打ったものは、仙一の遺族の生き方であったと思う。仙一の死後、彼らは家の近くにあった聖公会の三光教会で、司祭今井正道師から洗礼を受けたことである。今迄信仰をもっていなかった彼等は、世を逝った仙一と同じ道を進もうと思ったのである。まだ不可知論から抜け切らぬ兄は、彼等の思い切った行動に聊か不安の念を感じ、必ずしもこれに賛成でないことをもらした節もあったが、彼等は、天国にいる仙一と交りを続ける為には、彼と同じように洗礼を受けて教会に入り、教会の礼拝と生活を通して彼と交る以外に道はないと決心したのである」（佐々木 1983/ 111p）。

「昭和三十八年一月十二日、邦兄の希望と、二郎兄の案に従って、聖三一教会で同教会牧師秋山基一司祭と私達（順三）夫婦が教父母となり、弟二郎主教から洗礼を受け、続いて東京教区主教後藤真師から堅信式を受

けることとなった。その時、信子夫人も本人の希望により秋山司祭夫人、順三夫婦が教父母となり共に洗礼と堅信式を受け、夫婦揃って信仰の道に入った。この洗礼式は予め教会から発表されていたので、幾人かの教会関係の雑誌記者も見え、式後教会の会館で会見があった。彼等から受洗の動機を聞かれた兄は、淡々として『弟達が私の受洗を祈っていることを感得したので決心した』と事もなげに語って居た。私は、この時程正しい祈りが聴かれることを身に染みて感じたことはなかった」（佐々木 1983/ 116～7p）。洗礼を受けた翌年の 1964（昭和 39）年 9 月、邦は 81 歳で亡くなった。

Ⅴ．聖公会の信徒として

佐々木の生涯は、公私ともに、聖公会の信徒としての歩みを辿ったものであった。以下は、佐々木が立教大学総長在任中に書いた「建学の精神」と題する文章の一部である。

「次に立教の伝統に著しい影響をもつものは、ウイリアムス主教によつて伝えられた聖公会の精神（アングリカニズム）である。聖公会は宗教改革の当時以来、常に神学と教会との全き調和の上にキリスト教信仰の確立を努めて居る教派で、その考え方によれば、神学を始め学問の軽視は教会の生命を萎靡沈滞せしめ、同時に又、宗教的精神の欠如は学問の府を偏狭、衒学に堕落せしめるといふのである。この故に大学に於ける宗教的感化は、当然力強くなければならない。それは決して大学の生命を抑制する為のものではなく、却つて大学の正しい進展と充実の為に資するものであると主張するのである。立教大学が『自由の学府』たる所以は、実に、質実な信仰生活の中に自由博大な精神を包蔵するこの聖公会の伝統から来るものと称して揮らないであろう」（『立教大学一覧』（1954 年 12 月）所収）。

立教大学の歴代の総長の中でも、聖公会の特色とそれにもとづく大学の在り方をこれほど明確に強調した人物はいないように思われる。

一方佐々木は、総長在任期以来、多くの聖公会関係機関の理事や役員としてその運営に関わっており、特に退任後は、いくつかの「長」の職責を

果たしている。

＊香蘭女学校理事、理事長；1944（昭和 19 年）4 月～1972 年 6 月

＊滝乃川学園理事；1952（昭和 27）年 5 月～1962 年 10 月

＊日本聖徒アンデレ同胞会理事、会長、顧問；1952（昭和 27）年 11 月～1975 年 5 月

＊聖路加看護学園理事、理事長；1954（昭和 29）年 3 月～1973 年 3 月

＊キープ協会理事；1957（昭和 32）年 3 月～1967 年 3 月

これらは、日本聖公会の代表的な団体や施設、機関であり、聖公会員としての佐々木の貢献が顕著である。特に香蘭女学校との繋がりはほぼ 30 年に及んでいる。

教会員としては、東京諸聖徒教会の篤信の信徒として歩み続けた。教会を代表して、教区の決議機関である教区会に出席する信徒代議員としての役割を、1951～53、57～62 年にわたって務めている。さらに、東京教区の常置委員として、1957～60（ただし 1960 年度は記録が曖昧で未確定）にわたり教区主教を補佐する役割も担っている[24]。

風貌まで「長身でイギリス紳士を思わせる」佐々木はまさに典型的なアングリカンとして生きたのである。そのことについて佐々木はこう述べている。

「今にして思えば、私達は、その時（引用者注：桃山中学校への入学と、聖ヨハネ教会に通い始めた時）から聖公会に捉えられてしまったのである（マタイ伝十四・三一参照）[25]。今迄キリスト教を知らなかった私達が、桃山中学という聖公会の学校に入り、志を立ててキリスト教を学ぶようになった時、最寄りに新築された聖公会に入り、数十年の後、二郎兄は聖公会の主教となり、私は聖公会の立教大学で総長となり、中年以後信仰から離れて居た邦兄は、弟達の祈りに応えて、その死の三（ママ）年前、二郎兄から洗礼を受けて聖公会員となり、よき信仰の生涯を終ったことは、単なる偶然とはどうしても思われないのである」（佐々木 1983/ 33p）。

佐々木順三は、1976（昭和 51）年 5 月 2 日に聖路加国際病院において逝去

した。享年 86 歳であった。

注

（1） 立教関係者に対する追放の指示は 11 名であったが、内一人（縣康）は釈明を承認され、その結果、10 名が追放になった。

（2） 最初の子は女児で夭折した。

（3） 林蔵は、元来は静岡県清水村の大工であったが、その後ドイツで研鑽・修業を積み、建築技師となった。その波乱にとんだ職歴については、上記『立教学院史研究』の拙論を参照されたい。

（4） 邦は、東京の鞆絵小学校、同高等小学校、正則中学校、海軍予備校（後の海城中学校）、早稲田中学校、青山学院、慶応大学理財部予科、明治学院など多数の学校に入退学し学んだ。

（5） Henry St.George Tucker（1874～1959） アメリカ聖公会派遣の宣教師。ヴァージニア神学校を卒業後日本に赴任し、当初は東北地方で宣教・牧会活動に従事。後、東京に移り立教大学総理となり、池袋校地の購入など本格的な大学設立に向けて尽力した。その後京都教区主教に選任される。米国への帰国後、ヴァージニア神学校教授、ヴァージニア教区主教、米国聖公会総裁主教などを務めた。

（6） 新渡戸稲造（1862～1933）農政学者、教育者、思想家。札幌農学校で、同級生の内村鑑三と共に学び、また洗礼を受ける。1884～91 年、アメリカに留学。帰国後、札幌農学校教授、台湾総督府技師、京都帝国大学教授を歴任。1906 年に東京帝国大学教授となり第一高等学校校長を兼務。一高では多くの学生に人格的影響を与えた。1920～26、国際連盟事務局次長。帰国後は、津田塾大学の創立に尽力し、東京女子大学の初代学長を務めた。

（7） ゴア（Charles Gore 1853～1932）イギリスの神学者、主教。オックスフォード運動の指導者。キリスト教社会主義に関心をもち、1902 年からその団体であるキリスト教社会連合の第 2 代会長となった。

オックスフォード大学の若手の学者たちと、修道会的共同生活を行ない、礼拝、読書、討論、労働を共にした。また、定期的に集まって共同研究を続け、カトリック信仰を現代の知的・倫理的諸問題と適正に関連付けて理解しようと努め、その成果を論文として発表した。彼らは、イエス・キリストは今もこれからも「世の光」であるとの確信に立って、この論文集を『ラックス・ムンディ』（「世の光」の意）と名づけた。編集責任者を務めたゴアは、その序文の中で、信仰者はカトリックかリベラルかという二者択一ではなく、両者を総合する立場に立ち得るとして、自らの立場を「リベラル・カトリシズム」と呼んだ。そして、ゴアはこれこそアングリカンの基本的立場であり精神である〈ヴィア・メディア〉だとした。ゴアは、聖書批評学の適用を提起し、これに警戒感を持つ人から批判を受けたが、同世代はもとより、次代以降にも大きな影響を与えた。情熱的な人柄と簡潔で力強い明晰な説教で人を魅了したといわれるが、その話を度々聞いたという佐々木も、感銘を受けたことであろう。（ゴアやオックスフォード運動の担い手に関しては、塚田 2004 に詳説されており、本稿もそれによっている）

（8）ヘッドラム　オックスフォード大学教授。ヘンリー 8 世制定以来の欽定講座を担当し、ゴアと共にオックスフォード運動を展開した。佐々木が熟読した対象の一人であった。

（9）William Ralph Inge　イギリス聖公会司祭。ケンブリッジ大学神学教授。セントポール大聖堂の Dean（主席司祭）であったことから、Dean Inge と呼ばれることが多かった。ノーベル文学賞の候補に 3 回ノミネートされた。

（10）フーゲル　オーストリア人だが 15 歳からはイギリスに移り住んだ。ローマカトリック信徒で、現代的（Modernist）神学者、作家。

（11）本書で研究対象になっているのは、1662 年以来長く使われ続けてきている英国聖公会の祈祷書『The Book of Common Prayer』である。

なお同教会では、多くの曲折を経て、2000年に、新しい祈祷書を含むシリーズ Common Worship の使用を始め、これまでの祈祷書と共に併用されることとなった。余談ながら、国教会である英国聖公会では、祈祷書の改訂も国会の承認を必要とする。

(12) ニューマン（1801～1890）は、オックスフォード運動の推進者の一人。イギリス国教会の司祭であったが、カトリック教会に転じ枢機卿になった。本書で2頁にわたり引用されている言説のなかで、ニューマンは、使徒、聖徒、聖人を「信仰と清浄の模範」と表現している。

(13) フッカー（1554～1600）は、英国の神学者、司牧者。国教会の神学と伝統、組織を擁護する理論を構築して、台頭するカルヴィニズムに抗した。理性と寛容を柱として、ヴィア・メディア（中庸・中道）の立場をとるという、聖公会の特徴を強調した。

(14) ノーマン・オールト（1880～1950） 作家、イラストレーター、詩集などの編集者。17世紀のイギリスの詩の研究者。妻と共に児童図書も書いている。

(15) ニコルソン　神秘的な英詩の編集者

(16) デイヴィッド・セシル　Lord E. C. David Gascoyne-Cecil（1902～1986）。イギリスの伝記作家、歴史家。The Oxford Book of Christian Verse（1941）を編集した。

(17) パスカル（1623～1667）は、科学者、数学者。信仰者としては、ヤンセニウス（ジャシャ）の主導するヤンセニズム（人間本性の罪深さを重視することから、恩寵の絶対的な力を強調した）の立場に立っている。「パンセ」の著者。

(18) The Apology of Socrates & Crio（「ソクラテスの弁明」）は、哲学者プラトンが書いた「対話篇」の一つ。ソクラテスは、自らが信奉する神に関する主張で告発されたが、これに対して堂々たる弁明を展開した。プラトンは尊敬する師であるソクラテスの真の姿を描くためにこの本を書いた。

(19) Thomas P.Neill（1915～?）　アメリカのカトリックライター。「宗教と文化」は 1952 年刊

(20) キーブル（1792～1866）　神学者、説教者、詩人。アイルランド主教区の削減を図る議会に反対する説教を行ない、それがオックスフォード運動の先駆けとなった。

(21) ピュージー（1800～82）　オックスフォード運動の推進者の一人。運動を進めるためのトラクトに多くの論説を書いた。教父論や聖歌集を残している。

(22) 箴言 / 17 章 21 節「愚か者を生めば悲しみがあり／神を知らない者の父に喜びはない」のことと思われる。

(23)「都立高等学校」は、佐々木が立教に赴任する前に校長として勤務した旧制高校である。1929（昭和 4）年に創立され、1950 年に閉校となった。（現在の首都大学東京、都立桜修館中等教育学校の前身となる）

(24) いずれも「東京教区教区会議事録」による。なお調べることができたのは、第 20 回教区会（1956 年）から第 43 回（1962 年）までの間で、24～27 回、35 回については議事録が欠落しているために、この間の事情は不明である。

(25)「イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、『信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか』と言われた。」

引用・参考文献

佐々木順三　1939　『教会暦年の研究』聖公会出版

佐々木順三　1970　『平民の信仰覚書』私家版

佐々木順三　1983　『佐々木家の人々』（執筆終了 1976）私家版

寺﨑昌男・大島宏・山中一弘　2004　「佐々木研二氏インタビュー記録」立教学院史資料センター（未公刊）（本稿では、「佐々木 2004」と表記

佐々木邦編　1953　『明治学院生活』明治学院大学編集委員会

外山滋比古編　2000『佐々木邦　心の歴史』　みすず書房
松井和彦　2014　『朗らかに笑え　ユーモア小説のパイオニア佐々木邦とその時代』講談社
小坂井澄　2001　『評伝　佐々木邦　ユーモア作家の元祖ここにあり』テーミス
Henry St.George Tucker　1951 *Exploring the Silent Shore of Memory* Richmond,Va. Whittet & Shepperson
竹田鐵三　1997　『されど主よ』聖公会出版
塚田理　2004　『イングランドの宗教』教文館
森紀旦編　1989　『聖公会の礼拝と祈祷書』聖公会出版
森紀旦　2004　『わたしたちの祈祷書』日本聖徒アンデレ同胞会
立教大学文学部教務課『履修要綱』1958 年度～1965 年度

（立教大学名誉教授・JICE 所員）